思い出はツリーと共に

一緒に成長 最後の「向中生」

22日開業

希望634

「まるで私たちと一緒に成長してくれたみたい」

東京・墨田区立向島中3年の小林絵理香さん(14)は、教室の窓から見える634㍍の塔にほほ笑んだ。

学校から東京スカイツリーまでは約2キロ。入学した頃の高さは今の半分くらいだったが、どんどん伸びた。

「教室から、クレーンが鉄骨をつり上げているのを見ていたら、授業が先に進んでしまって焦ったこともあった」

こうして3万7000本もの鉄骨が組み立てられ、ツリーは世界一の高さになっていった。今は22日の開業を待つばかり。19、20日には、開業を記念した墨田区民の祝賀祭がある。

小林さんは祭りを盛り上げるブラスバンドの一員。

「ツリー完成のお祝いと、最後の卒業生として向中(向島中)への感謝の気持ちを込めて演奏したい」

1949年創立の同校は少子化で来年度、近くにある鐘淵中と統合される。小林さんたち3年生は最後の卒業生だ。2年生以下は新設される別の学校に通うことになる。

向中生にはそれぞれ、ツリーとの思い出がある。勉強でへとへとになった塾の帰り道、小林さんがふと振り返るとツリーが紫色にライトアップされていた。「なんだか励まされているみたい」とうれしくなり、疲れも吹き飛んだ。

小林さんと一緒に生徒会役員を務める荒川真悠さん(15)は、昨年3月11日の東日本大震災を思い出す。

揺れが収まって、同級生たちと避難した校庭からツリーが見えた。現場で働いている人たちが心配になった。父親の真さん(41)はツリーを建設した大林組の社員。ツリーのてっぺん近くで作業している同僚がいると聞いていた。

「ツリーが倒れなくてよかった」。家に帰って真さんに言うと、自信たっぷりの答えが返ってきた。

「そんな簡単には崩れないから大丈夫」

決して、簡単な揺れじゃなかったけど……。

真さん自身もツリーの着工直後、大事な基礎工事に携わっていた。「お父さんの仕事が支えたんだ」。そう思うと、ますますツリーが好きになった。

今月3日、ツリーの運営会社が「地元への恩返しに」と区民をツリーに入れてくれて、同校の生徒たちも展望台に上った。みんなで母校の場所を確かめたり、写真を撮ったり。「学校のみんなと一緒に上れるのはきっと最初で最後。そう思うと寂しかったけれど、忘れられない日になった」と生徒会長の根本泰佑君(14)。

「生徒たちが将来墨田を離れたとしても、ツリーを見たらきっと向中のことを思い出してくれるでしょう」。校長の菊本和仁さん(56)が目を細めていた。

(おわり)

スカイツリーが見える教室の窓から外を眺める向島中の生徒たち。左から小林さん、根本君、荒川さん(東京・墨田区で)＝伊藤紘二撮影

ツリー駅に特急停車

スカイツリー開業後は周辺の道路の混雑が予想されている。公共交通機関を充実させるため、3月からツリー最寄りの東武伊勢崎線とうきょうスカイツリー駅に特急が停車するようになった。開業日の22日からは、ツリーの足元と東京駅や羽田空港、東京ディズニーランドを結ぶ3路線のシャトルバスの運行も始まる。

讀賣新聞

平成二十四年五月十三日(日)全国版

本校の生徒のスカイツリーへの思いが掲載されました。